

# 強制起訴は年明けに持ち越しで ますます強まった 「小沢無罪」 (日刊ゲンダイ)

<http://www.asyura2.com/10/senkyo101/msg/585.html>

投稿者 純一 日時 2010年12月08日 19:37:15: MazZZFZM0AbbM

■検事役弁護士アタフタ、補充捜査はムダ 小沢一郎・民主党  
元代表の強制起訴が、年明け以降に持ち越しとなった。当初は「年内にも起訴」なんて一方的な報道があふれたものだが、フタを開けたら何ということはない。検事役の3人の弁護士が検察から引き継いだ捜査資料の分析作業に手間取り、遅れに遅れているのが現状だ。

そりゃそうだろう。この事件は“小沢潰し”ありきで突っ走った検察が、組織のメンツをかけて総力を挙げて捜査した案件だ。資料だけでも膨大な量に上る。それを3人で精査するだけでも大変なのに、補充捜査までするという。要するに起訴しても公判を維持できるだけの証拠がそろっていないから、アタフタしているのである。

名城大教授で弁護士の郷原信郎氏が呆れて言う。

「検察があればやって2度とも不起訴にしたのです。そんな捜査資料をもとに、検察審のデタラメな議決を受け、そのまま起訴したところで、証拠がないという事実は変わらない。検事役の弁護士たちも困っているはずですよ。補充捜査といっても今さらできることはない。小沢氏や秘書を聴取しても何も出てこないでしょう。資料の分析や補充捜査でどうにかなるレベルの問題ではないのです。当然、裁判の結果も見えているのだから、さっさと強制起訴したらどうなのか。いたずらに時間を費やしても、変な臆測が飛び交ったり、この国の政治にとってもメリットはありません」

“敵”は小沢陣営だけじゃない。「検察が組織にとって都合の悪い証拠を隠し、提出していない可能性もある」（事情通）というし、やっとなら強制起訴に持ち込んでも、マイナス材料はゾロゾロ出てくる。

「大阪地検の証拠改ざん事件で、検察の供述調書の信用性は失墜しました。来年1月に初公判が開かれる見通しの石川知裕議員の裁判でも、調書のデタラメが浮き彫りになるでしょう。水谷建設からの裏金疑惑に至っては検察が描いたストーリーだった可能性が指摘されています。彼ら秘書たちの裁判も小沢裁判に影響してくる。さらに言えば、小沢弁護団は現在3人ですが、起訴されれば7、8人態勢に増強するという。検事役の弁護士は敗戦必至ですよ」（司法関係者）

こんな裁判、やるだけムダ。国民にとっては百害あって一利なしだ。

朝刊なら東京新聞 夕刊なら 日刊ゲンダイ  
週刊誌なら 週刊朝日  
ネットを見るなら 阿修羅 掲示板

Googleで「阿修羅 拍手」でよく読まれている記事の一覧がでています。



## 号外デイリー阿修羅 001号 2010年12月11日(土) 東京新聞一日比谷デモ取り上げる (植草事件の真相掲示板)

### 検察不信が再燃 鈴木元議員 収監手続き機に

大物議員ら「送る会」/市民団体2500人デモ

新党大地代表、鈴木宗男元衆議院議員(62)の収監手続きが六日始まった。受託収賄など四つの罪で懲役二年、追徴金千百万円の判決が確定したが、本人はあくまでも冤罪を主張し、「納得はいかないが法には従う」と宣言して東京高検へ入った。国会の“元気印”も一敗地にまみれた格好だが、この収監、巷に溜まった検察不信の根深さを際立たせもした。(坂本充孝)

高く手を掲げて別れを告げる鈴木代表に、集まった支援者ら数十人の絶叫に近い声が飛ぶ。

「体に気を付けて！」

「負けるなっ！国策捜査なんかには負けるなっ！」

東京・霞ヶ関、東京高検の正面玄関で六日午後、そんな一幕が繰り広げられた。

鈴木代表はさすがに悲壮感を隠しきれない。

「密室で、検察のストーリーに基づいてつくられた罪によって、私は刑務所に入ります」と話して目を潤ませ、建物の中に姿を消した。

この四日前、東京都内の一流ホテル宴会場で、鈴木代表を送る会が開かれた。収監を控えた政治家のパーティーも異様だが、出席者の顔触れの“豪華”さは尋常ではなかった。

森喜朗元首相、鳩山由紀夫前首相にはじまり、伊吹文明、古賀誠両元自民党幹事長、額賀福志郎元同党政調会長、亀井静香国民新党代表、福島瑞穂社民党党首など党派を超えた大物が次々と壇上に立ち、鈴木代表に慰めと激励の言葉を贈った。

原口博前総務相らは「正義は一つ。私は鈴木さんの無実を信じている」と言い切り、「これは国家の畏だ。誰でも陥れられる危険がある」と指摘し、「絶対に許されることではない」と拳を振り上げた。さながら国会議員による検察の紛糾大会の様相となり、会場では「異常な事態だ」とささやく声が聞こえた。異例といえ、五日には東京・日比谷公園で、市民団体による、検察の在り方に抗議する大規模な集会が開かれた。

集会では、「検察は悪代官だ」などとする鈴木代表のあいさつが音声テープで流され、拍手を浴びた。また検察審査会の不透明性、袴田事件など冤罪が取りざたされる事件でも証拠の不開示性などが指摘され、終了後は法務省に向けて約二千五百人がデモ行進した。

実行委員長の前大阪高検公安部長、三井環氏は「検察を標的にした抗議デモは戦前戦後を通じて初めてだろう」と話す。

検察への不信感が高まった理由は明らかだ。

大阪地検特捜部による証拠改ざん事件で、組織にはびこる旧弊が白日の下にさらされた。だが、具体的な改革案は、いまだに示されていない。

民主党による取り調べの可視化法案の提出は議論の末、年明けの通常国会に先送りとなった。一方で可視化は、法務省内部でも検討を始めている。ただし「全面」ではなく「一部」としたり、交換材料に「司法取引」や「おとり捜査」を導入する案もあるとされ、依然として組織防衛のにおいも漂う。検察官の適格性をチェックする検察官適格審査会は六十年ぶりに息を吹き返した。今月二十七日に二回目の審査会が開かれるが、検適審の政治利用を懸念する声は根強く、どこまで踏み込めるか未知数だ。また「何よりも重大な隠ぺいが続いている」と指摘するのは、前出の三井氏。同氏は自らの現役時代の経験に立って検察幹部の裏金疑惑を告発した。「証人として国会に招致してくれればすべて話す」と公言しているが、呼応する動きはない。